

変わりゆくポーランドのお盆

津田 晃岐

私はこの4年間、ポーランドの西部の町、ポズナン市に住んでいる者だが、かつて北海道大学で学んでいたことから、札幌とも縁が深い。また、東京外国大学のポーランド学科にいた時には、ポーランド政府の奨学金をもらい、1998年から2000年にかけてクラクフ市に留学することができた。現在、ポズナン市のアダム・ミツケヴィチ大学で教えていながら、ポーランド人がいかに日本を見ているか、そしてポーランドがどのように変わったかを興味深く眺めている。そこで、変わりゆくポーランドの現在について報告を勧められた切っ掛けもあり、喜んで筆を執ったものである。

1. 「諸聖人の祭日」？それとも「死者の祝日」？

11月の初め、ポーランドでは「お盆」の季節である。会社も学校も休みとなり、町の中心部は比較的静かになる。一方、墓地のある郊外では、俄然にぎやかさを増す。多くの家族がこぞって墓参をするためである。墓地の入口付近では、色ガラスの瓶に入った墓前灯「ズニチュ znicz」や生花を、量の面でも種類の面でも、いつもより充実させた屋台が軒を連ねている。また、この時期に食べられることの多い生姜入りクッキー「ピェルニク piernik」や、私の住むポズナンでは名物の蜂蜜味の煎餅「ポズナン管 rura poznańska」（日本の瓦煎餅に似ており、大きな管の一部を切り取ったように反り返っている）を売る露店も出現する。墓地の周辺は自動車でごった返し、当然、渋滞ができ、あちこちに臨時駐車場が設けられ、中央分離帯にさえ車を止めている。警察官による交通整理が延々と続けられ、夜遅くまで誘導等を灯しているからだろうか、この「お盆」期間中の墓地周辺の交通規制も、警察用語で「ズニチュ」作戦と呼ばれる。

ポーランドの「お盆休み」について厳密に言えば、11月1日は「諸聖人の祭日 Uroczystość Wszystkich Świętych」と呼ばれ、ローマ・カトリック教会の定める祭日であり、すべての聖人および殉教者を記念する日とされている。ポーランド共和国の法律でも、国家の「休日」として制定されている。

一方、11月2日は、カトリック教会では通常「死者の日 Dzień Zaduszny」と呼び、「亡くなった全ての信者の記念日 wspomnienie wszystkich wiernych zmarłych」としている。

カトリック教会では祝祭日を、重要度の順に「祭日」「祝日」「記念日」に分けている。「祭日」は、典礼暦上最も重要な日で、前晩から祝われ、「祭日」が金曜日に当たる場合も小斎（毎金曜日に義務付けられて

いる、鳥獣の肉を摂らない食事制限）は免除される。代表的な「祭日」には、復活祭やクリスマスがある。ちなみに、毎日曜日は「主日」と呼ばれ、「祭日」と同等に扱われる。「祝日」は、前晩から祝われることはなく、当日のミサでも式次第が「祭日」と一部異なる。「記念日」は、カトリック教会あるいは当該教区全体で義務として祝う「義務の記念日」と、司式者の判断で任意に祝われる「任意の記念日」に分けられる。

ともかく、11月1日が「祭日」であるのに対して、11月2日の「死者の日」は「義務の記念日」として扱われる。もちろん、こうした教会の祝祭日の区分は、国家の法律が定める「休日」とは必ずしも一致しない。実際、ポーランドの現行法で「休日」として定められているのは11月1日のみで、2日は国家の「休日」となっていない。そこで大抵の場合、会社や学校が自主的に休業したり、各自が個人的に休暇を取ったりして、週末と合わせて数日の「お盆休み」をもらい、墓参ついでに実家へ帰ってゆっくりする者も多い。そのため、11月1日の「諸聖人の祭日」に、聖人や殉教者と関係なく、先祖や身内の墓を訪れる家族も多い。

墓参に来た家族は、墓石を洗ったり、周囲を掃除したり、新しい花を飾ったり、「ズニチュ」を灯したりして、先祖や最近亡くなった身内の安らかな眠りを祈る。カトリック教では、死後、小罪や償いが残っているために浄化を必要とする者たちは煉獄に留まるが、彼らの魂のために祈ることで、その浄化の期間が短くなり、早く天国に行くことができると信じられている。

ポーランドの「お盆」には、キリスト教以前のスラヴ民族の先祖供養の習俗「祖霊祭 Dziady」が透けて見える。ポーランドでは、この「祖霊祭」を伝統的に「慰霊祭 Zaduszki」と呼んでいる。キリスト教以前の民間信仰では、11月1日に祖霊が家に戻ってくると信じられていた。当日かまどを使わなくてすむように、前

もって祖霊の数だけパンを焼いておき(当日に火を使うと火事になると思われていた)、11月1日の晩に家族で集まり、祖霊のために祈り、帰ってきた祖霊をご馳走でもてなしたそうである。また、家の食卓ではなく、墓前に食べ物を供える風習もあったと言う。その後、キリスト教が受容され、土着の信仰と結びついたようだが、カトリック教会の定めた「諸聖人の祭日(11月1日)」と「死者の日(11月2日)」の区別は、伝統的な「慰霊祭」によって、かなり緩やかなものとなっている。教会も、それに関しては特に厳密な区別を強いていない。しかし、「諸聖人の祭日」と「死者の日」とが曖昧に混同されているのには、実はもう一つ理由がある。

11月1日は、共産主義時代にも国家の「休日」であり続けたが、当局はこの日の宗教的意味合いを弱め、世俗的な性格を与えるために、「諸聖人の祭日」ではなく「諸死者の日 Dzień Wszystkich Zmarłych」あるいは「死者の祝日 Święto Zmarłych」と呼び習わし、これらの呼称を広めた。結果、それらの呼称は、今でも人々の記憶に残り、カトリック教会の「諸聖人の祭日」と重なり、結びつき、混同されることとなった。そして、「諸聖人の祭日(11月1日)」=「諸死者の日」=「死者の祝日」=「死者の日(11月2日)」=「亡くなった全ての信者の記念日」=「慰霊祭」という、現在の緩やか連想のもと、人々は、特に厳密な区別を意識することなく、「お盆休み」を過ごしている。

2. ハロウィン



ポーランド語の「慰霊祭 Zaduszki」には、「死者の日 Dzień Zaduszny」という意味のほかにも、その日にちなんだ行事という意味もある。その行事とは、もちろん、墓参や当日のミサへの参列に限らない。しかも、祖先や亡くなった身内に限らず、いろんな意味で親しかった故人を記念する行事をも含む。そして、それは「慰霊祭」の名に相応しく、「祭り」色の強いイベントの場合もある。

この時期、ポーランドでは、今は亡き芸術家を偲ぶ追悼イベントが各地で行なわれる。例えば、「ジャズ慰霊祭 Zaduszki Jazzowe」では、現役のジャズ・ミュージシャンが集まり、亡き巨匠たちの作品を演奏しながら、音楽と祈りとで巨匠たちを追悼する。ポズナン市の場合、ドミニコ会の教会で今年も行なわれた。もちろん、ジャズに限らず、ロック、パンク、フォーク、ブルース、クラシックなど、様々なジャンルの「音楽慰霊祭 Zaduszki Muzyczne」も開かれる。自分にとって身近で特別だった歌手や作曲家を思い出しながら、彼らが残してくれた作品を鑑賞する。また、「詩の慰霊祭 Zaduszki Poetyckie」もよく行なわれる。今は亡き詩人の詩を朗読し、それを聴きながら、詩人に思いを馳せたり、近く世を去った身内を思い出し



たりする。

また、1989年の民主化以降、ポーランドには西側の習慣がどんどん流入しているが、2000年前後から「ハロウィン Halloween(ポーランド語でもこのように綴られる)」の風習もアメリカ経由で入ってきている。10月31日に祝われるハロウィンは、本来キリスト教と全く関係のない習俗だが、11月1日の「諸聖人の祭日」や11月2日の「死者の日」と日付の上で近いため、伝統的な「慰霊祭」と結びつきながら、着実にポーランドの文化に根を下ろしつつある。

例えば、我が家の近所でも、ここ数年、子供たちがこの時期の夕方、お菓子や小銭を目当てに各家を訪ねて回るようになった。しかも、その子供たちは、アメリカのハロウィン・パーティーさながら、魔女や死神の衣装で仮装しているのだ。当然のことだが、この時期の店舗のチラシや広告には、仮装のための衣装やアクセサリがちゃんと売られているし、中には、カボチャをくりぬいた提灯「ジャック・ランタン」の既製品を売っている店もある。

また、毎年10月終わりになると、多くのパブや学校で、ときには幼稚園でも、ハロウィン・パーティーが開かれる。それらのパーティーは、軽いスリルを味わえる、罪のない仮装パーティを謳っているため、そこに見られるオカルト的な要素や反キリスト教的なモチーフに特別注意を払う者はいない。インターネット上でも、様々なハロウィン・パーティーが宣伝されており、参加を誘う文句が氾濫している。中には、わざわざ11月1日の「諸聖人の祭日」にぶつけて、パーティを企画したパブもある。若者を中心としたパーティでは、新しい習慣であるハロウィンは、往々にして伝統への反抗精神、ロックやパンクやヘヴィ・メタルといった音楽、あるいはアルコールと結びついているようである。もちろん、魔女や死神、狼男や吸血鬼、ゾンビーなどの仮装も見られる。

しかし、このオカルト的な世界は、若者たちだけでなく、今や子供たちにとっても馴染みのものとなっている。ポーランドでも大人気となったハリー・ポッターの影響もあり、ハロウィンを祝うことは、もはや子供たちには普通のことになりつつある。子供のためのイベントとして、ハロウィンの提灯を作る親子工作教室なども開かれているが、提灯の色や柄こそ子供が自分で選ぶものの、そのモチーフたるや、やはり魔女や幽霊、吸血鬼やゾンビーといったものばかりである。

こうしたハロウィンの習俗については、キリスト教と無関係どころか、カトリック教会の教えに反対するとして、否定的な意見も少なくない。また、子供の成長の面からも、精神の発達に悪影響を与えるのではないかと憂える声も多い。



3. 「信仰年」

こうして、カトリック教国として根強いイメージのあったポーランドも、今では少しずつキリスト教を離れていっている。「キリスト教世界の砦」を自負してきたポーランドでさえ、こうなのだ。現在のヨーロッパのキリスト教離れ、というよりキリスト教への反感や無関心は、日に日に強まっており、その勢いには驚くべきものがある。

そうした中、今年(2012年)10月11日、ローマ教皇ベネディクト 16 世は、これからの一年間を「信仰年 Rok Wiary」とすることを定めた。それは、第二ヴァチカン公会議(1962~1965年)の開幕 50 周年を契機に始められたもので、2012年10月11日から2013年11月24日「王であるキリストの祭日」までの約一年である。キリスト教徒が自らの信仰について学び、再発見し、キリスト教徒であることに喜びを見出し、再び真の信仰へと立ち返り、それを通して周囲にも福音を伝えていくことを目的としている。

第二ヴァチカン公会議については、20世紀の最も重要な改革を行なった公会議で、カトリック教会の現代化を目指し、教会の制度や活動、教義、典礼などについて大幅な刷新が成された。公会議によって導入された変化は、枚挙に暇がないが、最も分かりやすい例としては、それまでラテン語でのみ行なわれていたミサが自国語で行なえるようになったことが挙げられる。

「信仰年」の開年は、ポーランドでは冷静に、しかも概ね好意的に、受け容れられている。少なくとも感情的な反発は起こっていない。メディアにおいても、保守派や愛国者、敬虔な信者を中心に、現代社会の精神的な荒廃や危険性、信仰の危機、そして国民あるいは個人の精神的支柱としての信仰の重要性が、ヒステリックな論調ではなく、訴えられ始めている。また、ポーランドの各地でも、すでに様々な行事が企画されつつある。例えば、大人のための「宗教」の授業、宗教的な映画の上映、ローマをはじめ世界の聖地への巡礼ツアー、スローガンを掲げての街頭行進、あるいは信仰をテーマにした討論会や学会やパネル・ディスカッションなどが行なわれる予定になっている。



そして、この「信仰年」に発する福音伝道の余波は、私のところにも到達した。「信仰年」開年に合わせて封切りを迎えられるように、映画の日本語字幕の制作を依頼されたのだ。それは『芸術と信仰——ヴァチカンの宝』というドキュメ

ンタリー映画で、ヴァチカン美術館の所蔵品を、キリスト教の歴史とともに紹介したものである。映画は、ヴァチカン市国委員会の依頼のもと、ヴァチカン美術館とポーランドの映画制作会社 TBA が共同で制作した。ポーランドとヴァチカンの初めての合作というだけでなく、そもそもヴァチカンにとって自ら制作に関わった初めての映画だそうで



ある。先日、ローマ教皇もこの映画を鑑賞したことがニュースになっていた。11月からDVDとして販売され、各国のテレビでも放映されるそうである。配給元はヴァチカン美術館である。

教皇は、サンピエトロ広場で行なわれた「信仰年」開年ミサの説教で、こう述べた。

最近の数十年間、霊的な「砂漠化」が進行しています。神のない生活と世界がどのようなものであるか——公会議の時代にも、それをいくつかの歴史の悲惨な出来事から知ることができました。しかし、残念ながら、現代のわたしたちはそれを日々、身の回りで目にすることができません。この空白は広がりつつあります。

(カトリック中央協議会 司教協議会秘書室研究企画訳)

現在、ほとんどヨーロッパにおけるキリスト教最後の牙城となっている観のあるポーランドに住んでいて感じるのは、「ヨーロッパ＝キリスト教」という図式が、もはやどうの昔の話になってしまった、ということである。そして、ポーランドもまた、同じ轍を歩んでいる、ということである。ヨーロッパの各国と同じように、ポーランドでも、脱キリスト教化は進んでいる。長年ヨーロッパを異教徒から守ってきた「キリスト教世界の砦」として、さらに去年列福された前教皇ヨハネ・パウロ 2 世を輩出した国として、他国に比べれば、まだまだキリスト教の伝統は残っている。しかし、高まる経済的な豊かさとは裏腹に、精神的な「空白」、心の「砂漠化」は確実に進んでいる。「ヨーロッパ＝キリスト教」という図式がもはや過去の遺物となってしまったように、「ポーランド人＝カトリック教徒」が当たり前でなくなる日も、そう遠いことではないのかもしれない。

つだ・てるみち(ポズナン外国語大学講師)